

哲学的文法

Philosophische Grammatik

岡田雅勝

Masakatsu OKADA

1) 哲学 (I)

哲学の探究とは、一般的に〈ものの本質の把握〉にあるとされる。『論理哲学論考』の著者も同様に〈言語、思考、世界〉の本質を問うことを哲学の探究の任務と受けとったのであった。「思考とは何か独特なものでなければならない」(PUI, 96)、「思考には後光がさしている」(PUI, 97)と考え、「思考の本質、論理の秩序、しかも世界のア・プリオリな秩序ないし世界と思考に共通でなければならない可能性の秩序を描き出すこと」(PUI, 97)に努めたのであった。つまり『論理哲学論考』(『論考』と以下する)の著者は、「その探究の特殊さ、深遠さ、重要さは、それが言語の比類なき本質、つまり命題、語、推論、真理、経験等の諸々の概念の間に成り立つ秩序を把握しようと努めている」(PUI, 97)であった。

後期ウィトゲンシュタインの哲学的探究は『論考』の思想との比較において理解されなければならないであろう。たとえば後期ウィトゲンシュタインの哲学の探究はかれの著『哲学探究』に注がれる。その著はかれ自身も述べているように過去16年間のかれの哲学的思索の軌跡を綴るものである。その間のかれの思索はたえず『論考』との対比においてなされていたのであった。後期ウィトゲンシュタインはそれゆえ『論考』の思想を捨て去ったのではないことがまず理解されなければならないであろう。かれの哲学の探究には、『論考』で述べられている哲学に対する諸々な態度とか探究の方法が依然として堅持されている。小論はもとより『論考』の思想と後期の思想との比較を試みることにあるのではない。しかし、後期ウィトゲンシュタインの思想はすくなくとも『論考』の思想との比較においてなり立つということが小論の展開に前提されている。

後期ウィトゲンシュタインの思想の要点は、〈深遠さや高みに事柄の本質が隠されている〉という考え、いいかえれば〈言語や思考や世界の本質を問うという〉哲学的姿勢に対して、そうした在り方で哲学することを〈中断する〉ということを提案しているようにおもわれるのである。そしてかれの哲学的探究が目差すのはつぎのようなものにある。

「私たちにとって最も重要なものの様相はその単純性と日常性によって隠されている」(PUI, 129)。こうしたかれの哲学的探究と『論考』のそれとに連続性をみるか、あるいは非連続的とするかは解釈するものの決断の問題であるようにおもわれる。小論は端的に後期の思想は『論考』の思想との対比においてのみ理解されるという観点に立つ。そのうえで、後期ウィトゲンシュタインの関心はもっぱら自然の言語の実際生活における用法を用法にそくして記述することに向けられていると受けとる。記述といっても、いわゆる辞書編纂の仕事をするのでは全くないし、またそうした用法について分類・整序でもない。日常言語の使用に関する形式が記述される。後期の思想においてあまりにも単純で、ありふれているがゆえに隠されている語の用法に目を向け、その形式が省察されていると解するのである。

2) 哲 学 (Ⅱ)

ウィトゲンシュタインに従えば、哲学は眼の前にあることを立言するのであって、何か特別なことを説明したり、推論したりするのではない (PUI, 126)。哲学する基盤は、何か特異なこと、驚嘆するようなことにあるのではない、それは私たちの身近にあり、あまりにも身近かで気付かないぐらい私たちの日常性そのものに与えられているというのである。したがって哲学は何か特別なことをすることにあるのではないし、また哲学した結果、何か重要なことがなされたり、創造されたりするということでもない。「哲学は全てをあるがままにしておく」(PUI, 124) といえるだけなのである。〈あるがままに〉といっても、何もかも放置して何もしないというのではない、〈本来的にあるがままにすること〉を意味する。

それでは〈本来的にあるがまま〉とは一体何を意味するのであろうか。哲学とはもとよりさまざまな問題を糧として生きている。さまざまな問題をかかえると〈途方にくれてしまう〉。それゆえ、「哲学の問題は途方にくれるという形をとる」(PUI, 123) というのである。それでは何故眼のまえにあることに、つまり日常言語の諸々の用法を立言するさいに途方にくれるというのであろうか。この問題を考えるあたり、かれが日常の言語をどのように受けとっていたかを見よう。

「私たちの言語に含まれるどの文章も〈そのまま秩序がある〉ことは明らかである、つまり私たちは、自分たちが使用している通常の曖昧な文章にはまだ完全無欠の意味などが無いから、完全な言語は自分たちによってまず構成されなくてはならない、などと考えて理想を追い求めているのではない、ということ。」、また他方では、「意味のあるところ必ず完全な秩序があることが明らかであるように見える—それゆえに、完全な秩序が曖昧な文章の中にも潜んでいるのでなければならない、と」(PUI, 98)。

日常の言語が十分によく秩序づけられていること、それゆえにその実際の用法に抵触

しないようにするためには、ウィトゲンシュタインはこれまで哲学者が用いてきた哲学的なタームを用いることなく、言語の実際的な用法にそくして問題が解決されなければならないと考えるのである。つまりつぎのようなかたちで言葉をその形而上学的用法から再び日常的な用法へとつれもどすことである。「哲学者たちが語—〈知識〉、〈存在〉、〈対象〉、〈自我〉、〈命題〉、〈名辞〉—を用いて、ものの本質を把握しようとしているとき、一体この語はこの語のふるさとである言語において実際いつもそのように使われているのか、といつも問われなくてはならない—。私たちはそれらの語をその形而上学的用法から再びその日常的用法につれもどす」(PUI, 116)。ウィトゲンシュタインは語の形而上学的用法によって哲学者たちが構築してきた空中楼阁を破壊し、言葉が立っているその地盤を露わにさせること(PUI, 118)に哲学的問題をみるのである。〈本来的にあるがまま〉に戻すとは、言葉をそのふるさとである言語の実際的な用語に戻すということであり、哲学はそうした言語の実際的な用法に抵触してはならない(PUI, 124)のであり、哲学は言語を基礎づけることができず、ありのままの言語の用法を記述するだけである。それが哲学の問題であり、その問題を処理したとしても〈哲学は全てをあるがままにさせる〉(PUI, 124)だけだとすると、哲学の問題はまさしく〈私は途方にくれる〉(PUI, 123)という形をとるといえよう。

また、「哲学の目的はハエにハエとり壺から出口を示すことである」(PUI, 309)、とウィトゲンシュタインは言う。哲学は、ウィトゲンシュタインにとって天空への上昇にあるのでも、魂の自由なる飛翔にあるのでもない、つまり形而上学的な言語の用法にかかわるのではない。もし空を飛ぶものを例にするなら、私たちのごく身近なところに飛び交っているハエこそ例にあげられる。そのハエがハエとり壺に入りこんで出口を見失ってしまえば、ハエの自然の動きが束縛されてしまう。ハエに出口を示し、逃がせば、ハエがもとの自然の姿に戻り再び飛び交うことができるようになるであろう。ウィトゲンシュタインはこのようにしてハエをひき合いに出すことによって、哲学の問題が、ごく身近な言葉の実際的な用法にかかわり、さまざまに束縛させているものを解き放つことにあると語ろうとしているのである。つまりごくありふれた通俗的な言葉に目を向け、言葉につきまとう誤解、無理解あるいは錯覚を排除し、言葉を本来的にあるがままの用法に戻すことにある。

それでは何故私たちは言葉を誤解したり、無理解なのであろうか。すでに述べたように日常の言語が不完全で、曖昧で、多義的であるからではない。日常の言語はそのままで秩序があるというのがウィトゲンシュタインの主張である。「私たちの無理解の主要な源泉は、私たちが私たちの語の用法を展望していないことである—私たちの文法には展望が欠けている—展望のきいた叙述は理解を仲介するが、それは私たちが〈連関をみる〉ということにおいてまさに成り立つ。それゆえ、連鎖の環を見出し、あみ出すことが

重要なことである」(PUI, 122)。展望していないというのは、言葉が実際の働きをしていないときである。〈哲学の諸問題は言語がお祭りするときに生ずる〉(PUI, 38)(Fest (お祭り) というコトバを藤本隆志氏は仕事を休んでいるときと訳されている[『ウィトゲンシュタイン全集8』46ページ]が、その訳語はお祭りの内容をも表わしていて相応しいものとする)とか、あるいは〈私たちが煩わしている混乱は言語が空回りしているときに生ずるのであって、言語が働いているときではない〉(PUI, 132)、とウィトゲンシュタインは述べているが、まさにこのような問題が生じるのは言語の用法を私たちが展望していないからだといえよう。〈展望のきいた叙述という概念は、私たちにとって基本的な意味をもつのである。それは私たちの叙述の形式、私たちがものを見る見方を表わしている〉(PUI, 122)。この展望のきいた叙述を〈本来的にあるがまま〉の用法に求めること、そこに眼がそそがれることに後期ウィトゲンシュタインの課題があるといえよう。その課題を遂行するために、〈哲学は、私たちの言語という手段を介して私たちの知性の呪縛に対して戦う〉(PUI, 109) ことにあるというのがウィトゲンシュタインの主張である。

3) 哲 学 (Ⅲ)

哲学はそうした知性の呪縛を解き放ったとしても、そのことによって何か特別なことが成就されるというのではない。哲学の目的は言語の用法について私たちの知識のうちに一つの秩序(多くの可能的秩序の一つであり、秩序そのものではない)を確立するにすぎないといえる(PUI, 132)。これが私たちの言葉の用法(*der Gebrauch unserer Wörter*)を展望することでもある。だが展望することの目的は、つまるところ私たちが煩わしている言葉の使用の無理解、混乱を除去し、そのことによって哲学的諸問題を完全に消滅することにあるのである(PUI, 133)。ウィトゲンシュタインは、哲学的諸問題の消滅ということで哲学的とされた専門用語をその言葉のふるさとの用法につれ戻すことを考え、そうした言葉の誤用に治療をほどこし、言葉の諸々な病いを癒すことを考えていたようにおもわれる。病気は治れば治療は必要ではない。それと同様に哲学的諸問題も明確になれば消滅してしまうというのがウィトゲンシュタインの考えである。この考えは〈哲学の仕事は本質的に解明から成り立つ〉(TT, 4・112)とか、〈読者は梯子を登り切ったのちそれを[『論考』で取り扱われた命題]を投げ捨てなければならない〉(TT, 6・54)[つまり『論考』で提出された諸問題が解明されたなら、『論考』はもう用済みであり、もうそのことによってナンセンスなものとなってしまっているということであり、読者はこのことを理解するとき、正しく世界をみるというのである]、という『論考』の立場と基本的に同じだといえよう。『哲学探究』においても、〈私たちが求める明晰さは無論完全な明晰さである。しかし、このことは単に哲学的諸問題が完全に消滅すべきで

あることを意味している) (PUI, 133) という形で語られているからである。

ウィトゲンシュタインは哲学的諸問題の解明及び消滅にあたってつぎのように述べている。

「本当の発見とは、私が望むとき哲学することを中断させるような発見のことである。—それは哲学に安らぎを与え、それゆえ哲学が哲学自体を問題にするような問いに駆り立てられることのないような発見のことである。—そしていまや実例にそくして一つの方法が示され、しかもこれらの実例の系列を中断することもできる。—一つの問題ではなく、諸々の問題が解消される(諸々の困難が取り除かれる)。哲学の方法は一つしかないということはない。実に様々な方法があり、いわば違った治療法(Therapien)がある」(PUI, 133)。

哲学的諸問題の解消とはその諸問題を日常の生活にもたらし、その言葉のふるさとである言語の実際的用法に照らし、それらに治療にあたることにある。ここではそれゆえに哲学的諸問題の是非が問われているのではない。ただ哲学することの中断によって、かの厄介な哲学的諸問題に駆り立てられなくとも済むような方法の発見が目差されているといえよう。

4) 文法的考察

「哲学の病いの主たる因—偏食。ひとは自分の思考をただ一種類の例で養う」(PUI, 593)。

偏食とは言語が一様に機能するという考えであり、その一般的考察によって言語の問題が解釈されるという考えである。こうした病いの治療にあたって、ウィトゲンシュタインは言語の実例にそくして、その多様な用法を記述することを企てるのである。だが多様な用法を一つの方法によって把握しようとするものでも、またそれらの様々な用法を統一的に把握したり、一つの体系のもとに整序しようとするものでもない。〈哲学は最終的に言語の用法を記述できるのである〉(PUI, 124)。このような記述を通して、以前から知られたことを整理整頓し、そこに混乱があれば、その秩序を回復することにある(PUI, 109)。このような言語の働きを洞察する哲学的考察がウィトゲンシュタインのいう文法的考察なのである(PUI, 90)。

ウィトゲンシュタインのいう〈文法 Grammatik〉という概念は多義的であるが、かれは〈文法〉ということでおよそのところつぎのことを意味しているようにおもわれる。つまり〈文法は言語における様々な言葉の用法を記述する〉(PUI, 496, PG, 23)、〈文法はいかなる仕方でも語の使用を説明しない〉(PUI, 496)。〈文法〉は言語規則を含む(PG, 23)のであるが、それは言葉の実際の使用を記述するゆえに、〈言語の営業簿といえる〉(PG, 44)。したがって、言語の実際の業務処理に関することは全てその営業簿からみて

とることができるといえる (PG, 44)。いうならば、〈言語の文法において、いわば諸連関全体を見い出すことができる。文が属している網の全体が文法にみてとられる筈である〉(PG, 102) というのである。

以上のようにおおまかではあるが、〈文法〉についてのウィトゲンシュタインの見解をたどってきたのであったが、かれのいう〈文法〉の概念はいわゆる私たちが用いている〈文法〉の概念とは無関係というわけではないが、懸け隔てているといえよう。かれのいう〈文法的考察〉とはまさしく〈哲学的考察〉であり、かれの〈哲学的考察〉はすでに述べた見解に立っており、いわゆる体系的考察ではない。したがって、かれのいう〈文法〉の概念もかれのいう〈哲学〉であり、いわゆる言葉の学習用の文法とか言語学者のいう文法のことをいうのでない〔無論〈文法〉の概念は多義的であり、そうしたことを一部含んでいるようにもおもわれるが〕、かれは〈文法〉ということで通常の文法書で取り扱っている文法のことを考えているのでも、ひとつの体系としての文法などを考えているのではないことだけは明白である。かれの文法的考察は多様な言葉の用法を記述することに向けられている。かれが記述する言葉の用法は多様で、豊富である。しかし、かれはそれらの用法を区分けをし、交通整理を努めるのではない。言葉の用法の形式をその用法の記述を通して把握することにあるようにおもわれる。そのさい、かれはこのような言葉の用法をゲームとして捉えようとしている。つまりかれは、〈言語と文法との関係をゲームとゲームの規則との関係において捉えよう〉というのである。

したがって、かれのいう〈文法的考察〉を理解するためには、かれの〈ゲーム〉について、とりわけ〈言語というゲーム〉について考察されなければならないであろう。その詳細はのち程とりあげるとして、ここでは言語と文法との関係を理解する必要な限りで説明するとして。私たちはどれでもいいが任意のゲームをするさい、そのゲームの規則に従ってゲームをするが、言葉の使用もゲームと同様であり、したがって言葉の使用は言語というゲームをすることである。その言語ゲームをするときに実際にそのゲームを導びいているのが文法である。

5) 文 法

ウィトゲンシュタインは諸々の文法について語っている。たとえば、語の文法〔〈知る〉、〈思う〉という語の文法 (BB, p 24, PUI, 187)], 〈痛み〉という語の文法 [(PUI, 257: ほか, PUI, 150, 182, 199, 492参照)], 語句の文法 [たとえば感覚与件を述べる語句の文法, BB, p 70], 文の文法 [PUI, 353], 状態の文法 [(PUI, 572) たとえば、あることを望んだり、知ったり、出来たりするといった状態の文法], 過程の文法 [(PG, 41), たとえば理解するという心的過程の文法] など、ほかに数の文法 (PB, 108), 時間の文法 (BB, p 59), 測定の文法 (BB, p 59) 等等多様な文法について語ってい

る。しかし、このように多様な文法について語っているのであるが、そうした諸々の文法に共有する文法とか、文法構造とか、文法規則とかを語ろうとしているのではない。かれの文法的考察は端的に語や文の意味の考察に向けられる。そしてそれらの意味の考察にあたるだけである。

たとえば〈語や文がわかるとか、わからないということの意味は一体何か〉と問うことにかれの文法的考察があるのである。とはいえ、〈ある言葉がわかるとか、理解する〉と言うことをめぐる文法的考察は非常に入り組んでいる。たとえば、〈わかる〉という言葉は〈心的な過程ないし状態〉と解するなら、その言葉を心理学的な意味とか、生理学的な意味に受けとることになる。しかしウィトゲンシュタインにとってそうした〈心的な過程とか思考的過程〉として問うことを意味するのではない。〈ある言葉を理解する〉ということは、その言葉の用法を知っていること、つまりその言葉を適用することができることを意味する (PB, 10)。さらに、それは〈その言葉の意味を理解している〉ことを意味するのである。

それでは、〈言葉の意味を理解している〉というのは一体どういうことなのであろうか。ウィトゲンシュタインはつぎのように述べている。

「文法における一つの語の位置が、その語の意味であると説明したい。

しかしまた語の意味とは意味の説明が説明するところのものであるともいえる。

意味の説明は語の用法を説明する。言語における語の用法がその語の意味である。

文法は言語における諸々の語の用法を記述する。

したがって言語と文法との関係はあるゲームとそのゲームの記述つまりゲームの規則の関係に似ている。

私たちのいう意味における意味は意味の説明に述べられている。それに対して意味という言葉が語の用法に結びついている特徴的な感じのことが考えられるなら、語の説明はその語の意味に対し、いわば原因と結果との関係に似ている」(PG, 23)。

このことからウィトゲンシュタインの言う、〈言葉の意味の理解〉についてつぎのようにまとめることができよう。〈言葉の意味〉とは、言語における語の意味である。そして語の意味は文法におけるその語の位置ということである。それゆえ、その語の意味とは言語における語の用法ということである。文法はその意味において言語における諸々の語の用法を記述するのである。また、ウィトゲンシュタインは〈ある語の意味とは、意味の説明が説明するところのものである〉と述べているが、それは意味の説明が語の使い方を説明するという意味である。このようにしてウィトゲンシュタインは〈意味の説明〉を文法的考察の主要な問題と受けとっているようにおもわれるのである。

6) 意味の説明

意味の説明にあたり、最も単純な説明は直示の説明である。たとえば赤い紙片を指しながら、〈これは〈赤〉である〉と言えば、その紙片が長いとか、円いとかの形とか、大きいとか、小さいとかの大小とか、ほかのことを言っているのではなく、その紙片の色が〈赤〉という意味を述べている。ところで、〈意味〉は文法における語の位置によって決まるといえる。たとえばいまあげた直示の説明において、〈この色は〈赤〉である〉といえば、〈これは〈赤〉である〉という文よりも、〈赤〉という語の文法の規定がより徹底的になされる。また赤色の円を指し、〈これは〈赤〉である〉といえば、〈この円の色は〈赤〉である〉という意味を規定しているし、そのさいすでに〈形〉と〈色〉との語の用法の相違が規定されており、〈円〉は形の語であり、〈赤〉はその語であるという理解がそこでは働いており、そのうえでそれらの語が用いられているといえよう。〈文法における語の位置がその語の意味を規定している〉というのは、その語の実際の適用にさきだち、その意味がすでにあらかじめ規定されていて、それを適用する人たちに知られていることをも意味する。任意の語の文規則への適用は言葉の実際の用法を無視して成り立たないことはいままでのない。たとえば、〈この円は〈赤〉である〉。〈赤〉に代入される語はまさに制約されている〈この円〉が主語である限り、述語は〈この円〉という語によって制約されている。したがって、〈この円は机である〉という文は一般的に誤った語の適用ということになる、〈この円〉という語が言語として機能を果たすとすれば〈赤〉とか、あるいは〈大〉、〈小〉等々という述語がおのずと限定され、〈文〉がつくりあげられる。その意味では、〈ある言葉の意味を理解している〉というのは、〈その言葉を適用する文法上の諸可能性を知っていることともいえよう〉(PB, 10)ということになる。

しかし、ある語を使うさいに、ある語が与えられるとそのことによって、はたして私たちはすでに一つの言語の文法規則を全て知ることが要求されているのであろうか。いま述べたように〈この円〉が与えられて、〈赤〉、〈黒〉等の述語があげられる。しかし、全てのその述語を一度に脳裡に浮べることはありえないし、また時間をかければ、それを遺漏なく枚挙できるといった類いのものでもない。文法規則に適用されえないような語の使用は当然排除され、どの語の用法も文法規則の枠内にある。もし文法規則の構造を論理的に分析し、論理的統語法によって文の可能的な構造を体系化にもたらし、そして文における語の適用の論理的な可能性を追求することに、文法上の諸可能性を知ることがあるとすれば、それはもはやウイトゲンシュタインの関心事ではない。

ウイトゲンシュタインの関心は日常言語の秩序を論理的に明晰な体系を記述することにあるのではない。日常言語を具体的な使用にそくして記述することにあり、文法における語の位置がその語を規定するというのもまた、具体的に使用される文例においてのみ指摘されることなのである。確かにどんな文であれ、ある文が発せられ、発信がな

されているときには、言語の体系がすでに前提されているのである。しかし、だからといって私たちがそうした言語の体系を熟知しなければコトバが使えないということにはならないであろう。たとえば、ある幼児について、〈その子がコトバを使える。その子はコトバがどのように使われるかを知っている〉というときに、〈知っている〉ということの基準は、その子がコトバの文法規則を知っていることでもないし、ましてやコトバの体系を知っていることでもない。ただ単に〈その子がコトバを使って他人と結構（あるいは十分）交信できること、つまり他人とコトバのゲームに参加できること〉を意味するにすぎないであろう。〈ある言葉を理解する〉ということは、それゆえ〈一つのゲームを理解すること〉になぞられる。たとえばチェスのゲームを理解するということは、その駒の名称を覚えたり、そのゲームの規則を語じていることではない。無論チェスがわかるとか、できることの諸条件に駒の名称を知ったり、規則を知ることが含まれる。しかし、それがチェスがわかるとか、できることの絶対的な条件ではない。駒の名称が知らなくとも、駒の動かし方を見て、修得したり、また規則をあらかじめ全て知らなくとも、みたり、教わったりして、ゲームができれば、チェスのゲームができたことであるし、わかったことでもあろう。したがって、チェスを理解すること〔あるいはわかること〕の意味基準はチェスが実際にできることであり、それにつきるといえる。言葉の意味も全く同様である。言葉を長い間話してきて、書きとめられて（つまり修得されて）、使用されることに言葉の意味がある。言語はゲームという観点から考察できるのである（PG, 25）。どのゲームも規則をもつようにまた言語も規則をもつ。文法とはそうした言語の実際的な用法にそくして言語の営みを記述するものである。

7) 文法と言語ゲーム

どのゲームにも共通したゲームの規則というのではない。確かにゲームを相互に比較すると類似点や類縁関係はあるにはある。しかし、厳密に言えば、どのゲームもそれぞれ異なっており、それぞれ別な規則をもつといえる。言語ゲームも同様である。どの言語ゲームもそれぞれ異った文法をもつといえる。ところで、〈言語ゲーム〉とは何かについてもっと詳しくたどるとしよう。

ウィトゲンシュタインは〈言語ゲーム Sprachspiel〉という言葉で、〈言語を話すということがある活動の、またはある生活形式の一部である〉ということを明らかにするための言葉として考えている（PUI, 23）。かれは〈言語ゲーム〉というのは、私たちの言語的行為が私たちの生活の形式に由来し、それゆえ言葉の存在としての私たちの基本的な事実に根差していると述べている。こうした私たちの基本的な事実を事実として記述することにウィトゲンシュタインの哲学的考察がある。ともすれば私たちはある事象を観察し、それを正確に記述しようとして事象間に因果性を求めがちになる。しかし、そ

のことによって事象そのものがかえって不完全で、歪められた形で捉えられることになってしまうのが常である。言語の事象においても全く同様である。これまでの哲学的考察は事象から本質を洞察し、その普遍の高みにおいてその形式を問うことにあった。そうした在り方に対して、後期ウィトゲンシュタインは言語事象の多様性を言語活動の事実性として厳密に記述することに向かうのである。しかし、かれの意図はあくまでも、哲学的考察にあるのであって、単なる枚挙のための記述とか、言語学的な考察にあるのではない、諸々の生活形式に根差した言語的行為の文法を語ることにある。

ところでウィトゲンシュタインは言語ゲームの諸例をつぎのように挙げている。

「命令する、そして命令に従って行動する—

ある対象を外観により、あるいは測定に基づいて記述する—

記述（図面）どおりに対象を組み立てる—

ある出来事を報告する—

ある出来事について推測する—

ある仮説を立て、検証する—

表や図によって実験の結果を示す—

物語を創作し、読む—

演劇をする—

輪唱する—

ジョークをつくり、それをいう—

算数の応用問題を解く—

ある言語からほかの言語へ翻訳する—

頼む、感謝する、ののしる、挨拶する、祈る」(PUI, 23)。

ここにあげられている諸例はどれもが具体的な生活の一部である。どの生活諸形態も上述のような多様な言語ゲームから成り立っている。ひとはどれだけ言語ゲームがあるかと尋ねたとしても、言語ゲームの多様さは固定的なものでも、最終的なものでもない。したがって無数に多様な言語ゲームの種類が新しく次々に発生するだろうし、またこれまでであったものが使われなくなり、忘れられていくこともあるのである(PUI, 23)。さらに、また多様な言語ゲームを整理し、分類し、言語ゲームの体系を構築したとしても、それによって何かが解決されるわけでもない。言語ゲームに何か共通性を求めたとしても、それはせいぜい一つの家族の人々の間に成り立つ、諸々の類似性〔たとえば：体つき、顔のかたち、眼つきなどが似ているということ〕が同じように重なり合い、交差し合っている程度のことではしか見い出されえない〔かれはそれを〈家族的顔似性〉と呼んでいる(PUI, 65, 67)]。

ウィトゲンシュタインは無数に多様な言語ゲームの営みに眼を向けることを通して、

これまでひとが言語に帰していた諸特性、とりわけひとが言語の一般的考察をとおして定義してきた諸特性というのは私たちの言語的行為の事実性に根差していないことを指摘しているようにおもわれる。たとえば同じ語によって呼ばれる事柄全てに共通した意味を求めたり、語の意味をそれゆえに一般に語りうるとしたり、あるいは文の形式を規定することによって、文の意味を正確に規定できるといったこと等がそうである。このような態度でもって、これまで統語法や文法構造や言語の文法の一般的形式が尋ねられてきたのである。ウィトゲンシュタインの〈哲学的文法〉はこうした考察に対する反省であり、批判でもある。

8) 意味と文法

言語ゲームの考察を通して、ウィトゲンシュタインが強調することは、どの言語ゲームにも共通する文法はないということであり、従ってそれぞれの言語ゲームはそれぞれ別な文法をもつということである。

たとえば、名前が物体にあたえられる場合と形態とか色彩、または長さにあたえられる場合とはそれぞれ異った文法をもつ (PG, 27)。つまり、例をあげるなら、〈Aは黄色である〉という文における〈A〉は、Aが物体である場合と、物体の表面では別の文法をもつというのである。この文において、Aは全て黄色だということは意味があるが、しかし表面が黄色だということは意味をもたないというのである。また、物体を指すのと、その長さ、あるいはその色を指すのはそれぞれ意味が違うというのである (PG, 27)。ウィトゲンシュタインにとって、〈名前や文が意味をもつのは、それらが属している記号操作の体系においてであり〉、〈意味とは、語が記号体系のなかで演ずる役割のことである〉 (PG, 27) ということである。

それでは一つの語に関して記号操作がどのようにしてなされるかをウィトゲンシュタインに従って、〈赤〉という語でみるとしよう。まずその色が文のどの位置にあり、その色をしている斑点あるいは物体の形がどうなっており、そこにどの範囲にわたって色がついているのか、あるいはその色は純粋なのか、ほかの色と混っていないのか、暗さ、明るさがどうであり、その色は一様に同じであるのか、変化の度合はどうなのであるのか等々、そうした〈赤〉に関してさまざまな様相が文において述べられよう。そのことによりそれらの文からさまざまな推論がなされたり、それらによってある映像を構成したり、あるいはそれらのことをひとつひとつに伝えて意思疎通することができよう。つまり〈赤〉という記号をさまざまに操作することによってさまざまな意味が規定されてくるのである。それゆえ〈赤〉という記号が記号操作の体系において〈意味〉を規定する役割を演じていることになるのである。

ところで、こうしてウィトゲンシュタインは語 (あるいは記号) が記号操作のなかで

果す役割を強調するのであるが、他方かれは一般的に言語的表出とされている〈ああ〉とか〈ふむ〉とか〈すばらしい!〉等々の嘆息とか、感嘆とかある感覺的表出とされるコトバを語としり取り扱われないのである。ウィトゲンシュタインのそれらのコトバについての考察についてたどるとしよう。たとえば〈ああ〉というコトバの意味についてひとが尋ねられれば、多分〈ああ〉とは嘆息であり、例として〈ああ、また雨だ〉という文をあげることであろうし、そのことによって、〈ああ〉というコトバの用い方が記述されたと考えることであろう。こういう考え方に対して、〈それでは、その場合ほかの記号操作、つまりほかの語でなされる複雑なゲームにあたるものは何か〉(PG, 31)とウィトゲンシュタインは尋ねる。そしてつぎのように続ける。〈「ああ」とか「わあ」とか「ふむ」といった語の使用にさいしては、そのような記号操作に比べられるようなものは何もない。ところで、このさい記号 Zeichen としるし Anzeichen とは混同されてはならない。「ふむ」という音声を疑念の表現と呼ぶことはできるし、それを聞く他人には、雲が雨のしるしであるように、疑念のしるしといえる。しかし「ふむ」は疑念の名前ではない〉(PG, 31)。

ウィトゲンシュタインは『哲学探究』において、〈基準 Kriterium〉と〈徴候 Symptom〉との間の文法上の揺れ動きにふれている(PUI, 354)。それは『哲学的文法』での〈記号(または名前)〉と〈しるし〉に対応するものといえよう。たとえば、気圧計の針が下がることは雨の降っていることの徴候であり、外があのようにみること(つまり雨が降っていること)が雨が降っていることの基準であると述べている。ウィトゲンシュタインは徴候だけによって、あることが実際になされることの基準を立てることができないと述べているのである。「ああ」とか、「ふむ」というコトバは嘆息なり、疑念のしるしといえるが、嘆息なり、疑念の名前(つまり語)ではないということによって、ウィトゲンシュタインはある語を用いて言語ゲームができるなら、その語が意味をもつというのであり、その限り、それは名前であり、しるしではないと述べているようにおもわれる。かれは感覺を表現するコトバをめぐって省察をめぐらしているが、ここでもそれが密接にかかわっているといえるのである。しかし、ここではかれの省察を省くとして、かれの〈語の意味〉についての考察は、〈内的過程〉とか、〈感覺の私秘性〉とかいって考察をも含めてなされているが、語の意味と言うときには〈語の公共性〉がつねに念頭におかれてなされているということを指摘することにとどめておきたい。

さて、語の公共性に語の意味の説明がなされているということウィトゲンシュタインに従って述べるなら、語の使用が実際の生活形式に根差しているということである。〈意味とは、その使用が生活と噛み合う、その仕方ではないか、そもそも語を使うこと自体が私たちの生活の一部ではないか〉(PG, 29)と問い、〈確かに言語は私の生活と噛み合っている。ところで「言語」とはどんなものかといえば、それは異質な部分から成り立

ち、言語が生活と嘯みあってくる仕方は無限に多様である〉(PG, 29)。かれは「ああ」とか「ふむ」〔そのほかにかれは〈多分〉、〈すばらしい〉等をあげる〕というコトバを〈感覚や感情の表現〉と呼び、それらは生活と嘯み合っていると認めるのであるが、しかしそれらのコトバはそれを発する各人の胸のなかに感ずるのであってそれはいわばプライベートの体験である。したがって、その意味でそうした表現を通常の意味の語とは区別しているのである。それゆえにかれはつぎのように述べる、〈語が感じによってひきだされているにせよ、感じが語に規則的に伴うにせよ、語が感じを発散させるにせよ、とにかく言語における経験の事実そのものが全てそうであるように、それらは私たちの関心外にある〉(PG, 30)。ウィトゲンシュタインの関心は〈事実上の実態ではなく、その形式〉(PG, 30)に向けられているといえよう。つまり「〈内的な出来事〉は外的な基準を必要とする」(PUI, 580)、ということにかれの目が向けられているのであって、したがって〈語の意味〉は言語ゲームにおいて適用されるか否かにその基準が定められているといえる。

9) 意味の諸相と文法的考察

ウィトゲンシュタインの意味の考察はつまるところ語、あるいは文の適用の形式に向けられている。しかし、それは単にその論理的形式が問題となっているのではない。チョムスキーの用語でいうなら、言語の表層構造の文法のみが考察されているのではなく、深層構造の文法をも合わせて考察されているのである。かれはつぎのように述べている。

「語の用法において〈表層文法 Oberflächengrammatik〉と〈深層文法 Tiefengrammatik〉とを区別することができよう。ある語の使用に関して私たちに直接的に刻みつけられるのは、構文におけるその適用の仕方であり、語の用法といっても耳で捉えられる部分にかぎられる—そこでまたたとえば〈意味する meinen〉という語の深層文法を表層文法が私たちに推量させるであろうことと比較してみよう。はっきりさせることが難しいとわかったとしても不思議ではない」(PUI, 664)。

深層文法は当然のこととして論理的構文法の問題ではない。ウィトゲンシュタインは内的な過程とか、心的過程といわれるもの存在を否定しない。しかし、そうした心的な過程とか状態を記述にもたらされる在り方に注意を払うのである。たとえばつぎの例をあげるとしよう。

「誰かが顔に痛みの表情をしながら、頬を指し、〈アブラカダブラ!〉と言ったときのことを考えよ。—私たちは〈それはどんな意味か〉と尋ねる。するとかれは〈歯痛を意味している〉と答える。—君はすぐこう考える。一体どうしてそのような語で〈歯痛を意味することができるのか。……〉(PUI, 665)。ウィトゲンシュタインは、〈アブラカダブラ〉という語が〈歯痛を意味する〉ということばとして用いることができると言う。

しかし、それはかれが〈歯痛〉に与えた一つの定義であって、その語を発するさいに、かれの中に起っていることの記述ではないというのである (PUI, 665)。ここで述べられていることの意味は重要である。というのも私たちは通常言葉というものはある事態とか、ある内的過程が前もって存していて、それらの事態につけられたものとか、あるいはそうした内的過程を表現するものと考えている。ところで、ウィトゲンシュタインは、私たちが〈私は私の歯痛を記述する〉という文と〈私は私の研究室を記述する〉という文の表層文法がきわめて類似しているために、この二つの言語ゲームの間に違いがあることを忘れがちであることを指摘している (PUI, 290)。ウィトゲンシュタインは私たちは〈私は歯痛である〉と表現できるが、しかしそれによって〈私の歯の痛み〉を記述したことになる、つまりそれは私の感覚で起っていることの記述ではないという。それに対して、私が自分の研究室を記述し、たとえばそこには机があり、カレンダーがそのうえにあり、窓からは〈大雪山〉が望むことができる等と記述することができる。したがって、前者の二つの文は全く違った文法をもつというのである。しかし問題なのは、私たちは自分の深層構造に関して、それをどのように記述できるのかということであろう。ウィトゲンシュタインは言う、〈内的過程〉を表現するには〈外的な基準〉を必要とする (PUI, 580)、と。〈外的な基準〉とは外的に観察できるものであり、〈言語ゲーム〉がそれによってできるものということである。私たちは各自それぞれ自己特有の意味の世界をつくって生きているようにおもわれる。しかし、その場合、〈あなたの言う意味とは何か〉と尋ねられたとしたらどうであろうか。私たちはそうした事柄が他者と理解を共有しえないという感情でもって、自分の世界に閉じこもって仕舞うのではないだろうか。私たちはソリブシズムの世界に生き、自分自身とだけ言葉を交わしているような気持ちでいるときに、自分にとって何か大切なもの意味をもっているかのように考えがちである。

ウィトゲンシュタインはそうした形での言葉の働きを否定するものではない。しかし意味とは何かという問いには、それによって言語ゲームができるものというのが意味の基準であると答えているのである。ウィトゲンシュタインが私たちに示す意味の諸相は多様で、入り組んでいる。しかし、かれは〈意味〉ということによって、間主観的な了解ということを常に考えていたようであるし、それゆえに行動主義的観点にも立っているものとも解される。私的な世界について語ることをしたとしても、間主観的な言語 (つまり日常の言語) でしか、言葉の意味は記述されないし、またその言葉でもってしても私的な世界は語りえない (たとえば痛みそのものを記述すること) ということ語っているのである。ウィトゲンシュタインのいう〈文法的考察〉とは、実際の生活形式において語られる言葉の諸々の実際の用法に即して、考察することであり、言葉を〈一定の規則に従ったゲームという観点から考察する〉ことである。そしてかれの文法的考察の

目差すところは、〈私たちの求めるものは完全な明晰さである。しかしそれによって哲学的諸問題が完全に消滅すべきことを意味している〉(PUI, 133) ということである。

註および関連文献

I) 小論作成にあたり、ウィトゲンシュタインからの引用は下に掲げる略号で示した。そのさい原文の paragraph からの全文の引用は「……」(PB, 10) [例] で示し、その一部の引用は〈……〉(PB, 11) [例] で示し、その要旨については、本文のあとに (PB, 12) [例] というように示した。また [……] は筆者が付した註である。

- BB L. Wittgenstein, *The Blue and Brown Books* (Oxford: Basil Blackwell; New York: Harper & Row, 1958).
- PB L. Wittgenstein, *Philosophische Bemerkungen*, ed. Rush Rhees (Oxford: Basil Blackwell, 1964).
- PG L. Wittgenstein, *Philosophical Grammar*, ed. Rush Rhees, trans. Anthony Kenny (Oxford: Basil Blackwell; Berkeley: University of California Press, 1974).
- PU L. Wittgenstein, *Philosophical Investigations*, trans. G. E. M. Anscombe (Oxford: Basil Blackwell; New York: Macmillan, 1958).
- TT L. Wittgenstein, *Tractatus Logico-Philosophicus*, trans. D. F. Pears and B. F. McGuinness (London: Routledge & Kegan Paul; New York: Humanities Press, 1961).
[註. PUIはPUの1部のことをさす]

II) 関連文献

- Anscombe, G. E. M. *Collected Philosophical Papers*, vol.1 from Parmenides to Wittgenstein, Oxford, Basil Blackwell, 1981.
- Bartley III, W. W. *Wittgenstein*. London, Anchor Press, 1973.
- Brand, G. *The Central Texts of Wittgenstein*, Oxford, Basil Blackwell, 1979.
- Fann, K. T. (ed.), *Wittgenstein*, New Jersey, Humanities Press, 1967.
- Fogelin, R. J. *Wittgenstein*, London, Routledge & Kegan Paul, 1976.
- Luckhardt, C. G. (ed.). *Wittgenstein. Sources and Perspectives*, Harrocks, Sussex, Harvester Press, 1979.
- Malcolm, N. *Thought and Knowledge*, Ithaca, London, Cornell Univ. Press, 1977.
- Morick, H. (ed.), *Wittgenstein and the Problem of Other Minds*, New York, McGraw-Hill Book, Company, 1967.
- Rhees, R. *Discussions of Wittgenstein*, London, Routledge & Kegan Paul, 1970.
- Specht, E. K. *The Foundations of Wittgenstein's Late Philosophy* (Trans. by Walford, D. E.), Manchester, Manchester Univ. Press, 1969.
- Savigny, E. V. *Die Philosophie der normalen Sprache*, Frankfurt am Main, Suhrkamp, 1969.
- Stegmüller, W. *Hauptströmungen der Gegenwarts-Philosophie*, Bd I, (6 Auflage) Stuttgart, Kroner, 1976.
- Tugendhat, E. *Vorlesungen zur Einführung in die sprach-analytische Philosophie*, Frankfurt am Main, Suhrkamp, 1979.

